# 信濃天然記念物

矢澤米三郎著

納本

特203
785

信濃郷土叢書
第九編

始

特203
785

信濃郷土叢書
第九編

# 信濃天然記念物

矢澤米三郎著
畫及幀裝者著

發行所
信濃郷土文化普及會

佛法僧
雲間夜黄蝶
小緋縅蝶
羚羊
深山紋黄蝶
麻升隠戸
雲間紅日影
花木
深山白蝶
高嶺日影

鶯黃
鶯黃
羊鈴
麻雀
蘇木
白鷺
白鷺

第二圖

枝垂栗

羽衣槲

突貫草

（據長野縣天然記念物調査報告）

第三圖

寢覺床

蛇石

鐃鈸石

（據長野縣天然記念物調査報告）

# 序

美篤刈る信濃の國は大日本帝國の屋根に位して、山は高く谷は長く、天は澄んで水は清い上に、土地は廣く溫度も樣々で、動・植・鑛の種類も多く、天然記念物として保護すべきものも少なく無いから、決して小さな書物位で、一々之を說き悉すことは出來ぬ。

此書物は前編と後編とに分けて、前編には主として國の指

定保護に係る資料を簡單に述べ、後編には早晩指定される様に思はれるものを書く事にした。

材料は國と縣との天然記念物調査報告や、其他の書物に據る所が少なく無いから、委しい事柄を知りたい人は次の書物を見たり、實地に就て調べて戴きたいと思ふ。

（一）内務省編　天然記念物調査報告
（二）長野縣編　史蹟名勝天然記念物調査報告
（三）内務省編　史蹟名勝天然記念物保存要目解説
（四）矢澤米三郎著　雷鳥
（五）同　著　上高地
（六）三好學著　天然記念物解説

此外にも尚天然記念物として貴重の資料も多くあらうと思ふから、氣の付いた方は十分保護される様に御盡力を切望する次第である。

昭和四年六月

著者

# 目次

## 前編


一　雷鳥……一
二　佛法僧……四
三　羚羊……六
四　枝垂栗……八
五　枝垂榎……九
六　花の木……一〇
七　八重咲黄花石南花……一一
八　光蘚……一三
九　天狗の麥飯……一四
一〇　戸隱升麻……一六
一一　化粧柳……一七
一二　駒草……一九
一三　白馬連山の高山植物帶……二一
一四　上高地高原……二四
一五　地獄谷の噴霧孔……二六
一六　白骨及湯俣の噴湯丘……二七
一七　中房溫泉……二九
一八　寢覺の床……三〇
一九　天然記念物……三三
二〇　櫛……三五
二一　其他の植物……五四
二二　蛇石……五七
二三　武石と綠簾石……五八
二四　鐃鈸石……六〇
二五　餘論……六三


## 後編


二六　山鼬……三五
二七　日本犬附豺……三六
二八　高山蝶……三八
二九　螢……四四
三〇　社叢……四五
三一　植物遺存帶……四六
三二　二度栗……四七
三三　松と杉……四九
三四　姫刺樅……四九
三五　公孫樹……五一
三六　櫻……五一
三七　梨……五三


## 挿圖


第一圖＝佛法僧・羚羊・雲間褄黄蝶・小絣縅蝶・深山紋黄蝶・雲間紅日影・深山白蝶・高嶺日影蝶・花の木・戸隱升麻
第二圖＝枝垂栗・羽衣槲・突貫草
第三圖＝寢覺の床・蛇石・鐃鈸石
第四圖＝光蘚
第五圖＝指定天然記念物分布圖
第六圖＝天然記念物分布圖

信濃郷土叢書

第九編

# 信濃天然記念物

矢澤米三郎著

## 前編

### 一、雷鳥

日本アルプスの偃松帯以上の山小屋に泊つたり、テント生活をした人は、朝夕の靜かな時分に偃松の中で、低い調子で「グーグー」と蟾蜍の様な聲を聞くであらう。又霧の深い日には日中でも、山頂に近い石の上や岩の角に立つて、動かぬ鳥を見るであらう。此の鳥こそは古來山上の神使として尊敬されたり、山靈の權化とか、高僧の懷か

しい友達だとか云はれる雷鳥で、山岳も此鳥が居れば、一層神聖な感じが深くなると迄云はれて居る。

雌は褐色に黒い斑があつて、丁度黄雌鷄の羽に似て、大きさは雉より少し小さい。此色が岩の上に地衣や苔の生へた色とよく似て居るので、如何にも其の住んで居る場所の色に似て、自然に外敵の目を免れるので、之を保護色と云ふて居る。

時々母が三四羽から六七羽の雛を伴ふ事がある。雛は丁度鷄や雉の雛に似た黄色の柔かい綿毛があつて、孵化するや否や母に從つて餌を求める。唯其脚の先まで綿毛が薄く生へて居るのと、頭が栗色なので、鷄や雉の雛と區別される。擧動は極敏捷で、直に偃松の中や木の根や岩の間に隱れるが、間もなく出て、「ピーピー」と高い鋭い聲で母を呼ぶ樣は、如何にも可愛らしい。

雄は雌よりは黒味勝で、其斑紋も一層細かで、眼の上の肉冠は美しい赤色で、特に尾を上げて地上を走る習慣があるので、容易く雌とは區別がつく。



九月頃から羽が拔け代つて、日毎に白い羽が增して碁石斑になり、十一月には雄も雌も殆んど純白となつて、丁度山頂に積つて居る雪と同じ色になるので、其身を保護するに都合がよい。此頃になると、十羽以上も一所に集つて、日向側の雪の少ない場所に住んで居る。

食物は大體偃松帶の下草で、岩高蘭・苔桃・米葉栂櫻・黄花石南花・峰蘇方等の葉や果物や昆虫等が、其主なるものである。

巢は偃松の中へ下草を敷いて、灌木や地衣を集め、自分の拔け羽を利用して作つて居る。卵は褐色で黒い砂粒の樣な斑が不規則に散在して居る。長さ四十六粍、巾三十一粍内外である。

加賀の白山の雷鳥は、昔から有名であつたと見えて、今から七百年以上も前に畏くも後鳥羽天皇の御製に、

白山の松の木かげにかくろひて

やすらに住める雷の鳥かな

とあり、又古來雷除になるとて、雷鳴の時には其圖を掲げたさうである。

白山以外では、雷鳥の分布は、日本アルプスの八千尺以上の連峰に居る許りで、今日の様に登山熱が盛んになれば、年々減少する恐があるから、保護鳥になつて居る。

信仰者は「御鳥」と云ふて尊敬し、其姿を見るさへ光榮として居る。況して其抜け羽一枚を拾つても大喜びで持ち歸り、魔を掃く時に使へば靈驗があつて、違魔が無いとの迷信さへ傳はつて居る。

## 二、佛法僧

一見熱帶鳥らしい奇麗な鳥で、大きさは鵲位、大体は褐色であるが、鮮かな綠や紫の光澤があつて、喉は濃い紫の中に藍線があり、翼や尾は紫色である。其棲



んで居る青々した森林を背景とすれば保護色になる。翼の中程に、空色の斑紋があつて、飛ぶ時には特に目立つて、紋附を着た様に見えるので、木曾地方では俗に「紋附鳥」と云ふて居る。

嘴と脚は朱の様に赤く、雌は雄に比べると、光澤が薄くて、全体に黑味を帶びて居る。

四月下旬に暖地から渡つて來て、立木の孔の中に巣を作る。卵は長さ二十九粍、巾二十二粍で、丸形で白い。抱卵二十二三日で孵化し、父母協力で餌を運ぶ。食物は主に昆虫である。八月の風の無い夕方に、親子連れ立つて大圓を描いて樂しげに飛び廻つて、九月には去つて其影を見せぬ。

鳴き聲は「佛法・佛法」と郭公の調子位に繰返し、調子づくと「佛法僧」と三聲に續けて、五月六月と八月に最もよく鳴く、特に夜の八時から朝まで靜かな森の中で鳴くので、昔から高野山とか比叡山とか、日光とか秩父とかで有名で、本縣では南は木曾・

下伊那附近から、東は南佐久、北は下高井・戸隱・北安曇まで廣く全縣下に分布して居る。特に木曾福島の御料林は近年有名になつて、學者の注目を惹き、保護區域に指定された。

## 三、羚羊

羚羊は日本特有の天然生山羊で、高山の喬木帶の上部から灌木帶・草本帶の間に棲んで居る。其皮は綿毛が密生して、一寸四方に一萬八千本もあるから、敷物に用ひられる。「カモシカ」(氈鹿)「ニク」(鞣)等の名は是から出て居る。又鞍に布くから「クラシシ」とも云ひ、近年では登山者の尻皮にも、背皮にも、靴用にも供せられる。又岩の上を自由に濶歩するから「イハシカ」とも云はれて、延喜式には、本州や四國の國々から貢いだものである。



體重は七貫から十三貫の間で、背中は黑く、多少灰色や褐色や青味を帶びて居り、頭には短い二本の角がある。此角を二寸許りの長さに切つて、魚形にして鈎を附けて鰹釣に用ひたり、又下熱劑として犀角の代りにも用ひられる。

蹄は二つあつて割合に尖つて居るから、自由に岩角を傳ふ事が出來るので、昔の人は其底に「岩吸」と云ふ吸盤があると誤り傳へて居つた。足跡は並行した二線であるから、之を目印にして通路を判定する事が出來る。高山の灌木帶には往々羚羊の途があつて、途中に角を磨いた痕跡が殘つて居り、登山者が此途に迷ひ込んで、とんだ失策をする事がある。

谷間の草原へ出て、草や灌木を食するのを見る事もあるが、嗅覺が鋭いから風上から來れば、直ぐ嗅ぎつけて「シャッ・シャッ」と鳴いて逃げてしまふ。一年に一回、四月頃唯一匹の兒を生むのみであるから、繁殖力は自然弱いので、保護動物に加へられて居る。幼兒は凡一年の間は母に伴はれて居る。

犬や獵師に追はれると、嶮岨な岩を傳つて逃げるが、時々振返つて追手の様子を見て居るから、踊の眞似をすれば、一心に其方にのみ氣を取られて居るので、昔から踊好の獸と云はれて居り、其隙に狙ひ撃をされるのである。

## 四、枝垂栗

中央線の小野驛から東へ十町程の楡澤に「天狗の林」がある。天狗の小さな祠があつて、其周圍凡一町四方位は皆枝垂栗で、其枝は妙にうねり曲つて古雅であり、太い枝は波の様に「ウネウネ」して居り、若い枝は枝垂柳か糸櫻の様に垂れて、其先が地を掃いて居る。全体は傘を開いた様で、木の芽のふく頃は紫で藤の咲いた様に、六十本も並んで居る有様は實に見事である。里人は「天狗の栗」と云ふて落す人が無い。

栗毬の中は三つ栗で小さく、其落ちたのを拾つて蒔けば、皆枝垂栗になる。植物學



上から見れば普通の栗の「偶然變化」で、其性質が遺傳する迄固まつたものである。野生でありながら斯様な著しい畸態をする事は珍らしいので、保護されるのである。

枝垂栗は信濃が最も多く、美濃・飛驒が之に次いで居る。菅茶山は「備後にもある」と書いて居るが、本當に同物か如何か分らぬ。本縣内では上伊那の小野・朝日・伊那富川島・中澤・等の村々や、諏訪の川岸、平野、下諏訪一帶の小山にあつて、蜀山人の紀行にも和田峠の樋橋に二本あると書いてあるが、今では見受けられぬ様に思ふ。其外でも下伊那の大河原、西筑摩の楢川、小縣の西内・和田、南佐久の南牧にも分布して居るから、注意さへすれば方々で見出す事が出來るだらうと思はれる。

## 五、枝垂榎

野生では無いが、榎の枝垂れは極めて珍らしい變態で、小縣の東内村字新屋の藥師

堂前と、西筑摩の山口村諏訪神社境内の栗島社前とに一本宛ある。本縣内でも此二本の外には未だ何處にも見當らぬが、三好博士は「日本中にも恐らくは此二本の外には有るまい」と云はれる程であるから、特に其保護に注意を拂ふ必要のある事と思ふ。

## 六、花の木

花の木は一に花楓とも云ふて、若葉は卵形で淡綠色であるが、老葉は三出で裏が白くなり、秋の稻刈の頃には美しい紅葉となる。

花は雄花と雌花と別々で、苗代期に枝の先に集つて開いた時は鮮紅色で、遠くからも眞赤に見える程に美しい。果實は楓の樣な翅があつて赤い。

山間又は山腹の濕地で水蘚等の生へて居る所に多くて、稀には其近所の森林中にも雜つて居る。幹が眞直で色が赤いから割合に目立ち易い。土地の人は木の皮を剝取つて目藥に用ひて居る。



岐阜縣の東南部が此木の本場で、信濃や三河や近江にも自生し、尾張や伊勢にも、移植されて居る。

花の木は植物分布上、北米の東岸大西洋に面せる地方にあるもので、それと日本の植物區系との類似を示す材料にもなり、又此の珍しい植物の分布の境を示す爲にも、自然生のものを保存するが宜い。

本縣内では、下伊那の旦開・根羽・會地・伍和・下條・山本・上郷等の村々や、西筑摩の神坂・田立・大桑等にもあり、岐阜縣の坂本や苗木にもある。特に釜戸の龍吟山天尤寺の門は此花の木で作つてある。

## 七、八重咲黃花石南花

黄花石南花は日本アルプスの七八千尺以上の高山帶にある小さな灌木であるが、八ケ岳の横岳頂上附近には、其雄蕊が花瓣に變じた八重咲がある。栽培品の八重咲は何も珍らしく騒ぎ立てる程でも無いが、野生石南花の八重咲は植物學上面白いので保護されるのである。

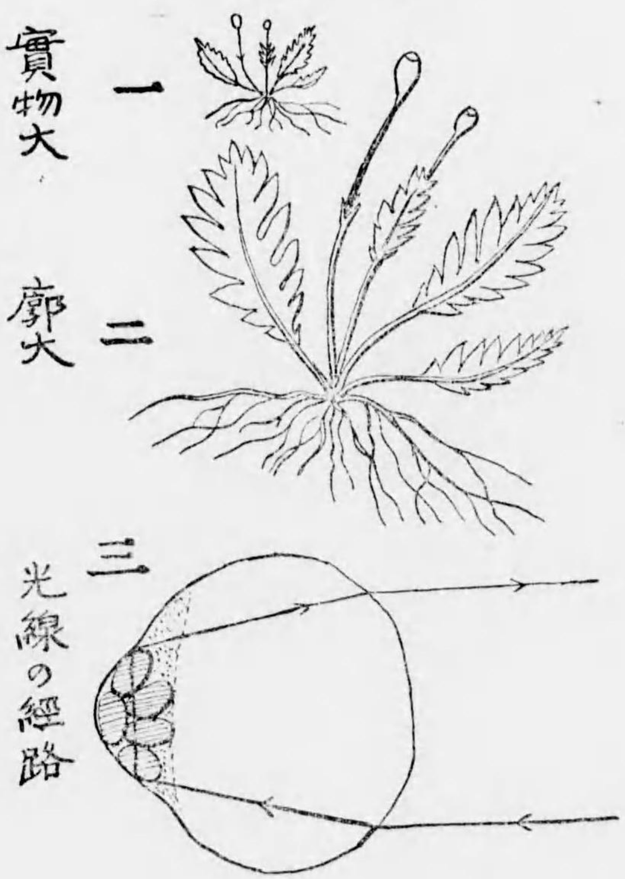
其地域には、偃松が茂つて居り、少數の高根櫻や深山榛もあり、虫取菫・深山車・黒百合・得撫草・信濃金梅・兎菊・峰蘇方等の高山性の草と混生して居るから、其自然の儘に保存せねばならぬ。

## 八、光蘚

山地の洞穴や木の根で、天の明るい光線を北から受ける所を覗くと、地面が萠黄色の美しい物凄い光を放つて居る。是は光蘚が發生して、其糸狀體が日光を反射して青



光蘚




光するのである。

光蘚は僅に二三分の小さな蘚で、葉は羽狀に裂けて薄暗い少し濕氣のある所に生へて、空氣中の炭酸ガスを分解して生活して居る。丸い南京玉の樣な囊の中に胞子が出來て、それから出來た糸狀

體が反射光を放つのである。此糸狀體の細胞は丸くて六七個の葉綠粒を含んで居り、適度の光線に遇ふと、此粒が一方に集合して、細胞の透明の部分が丁度「レンズ」の樣に光線を屈折するから强く光るのである。若し光線が强過ぎれば、却て鮮綠の美しさを見る事は出來ぬ。

此蘚は明治四十二年に岩村田の上の城の千疊敷で發見されて、洞穴内植物の代表として保存される事になつたが、今では殆んど全縣下に亘つて三十餘ヶ所にある事が知れて居る。

縣外でも、鹿澤・草津・日光や北海道に分布する事が知れた。獨逸のブンシーデル附近のルイゼンブルグでは、其發生の良い場所を選んで天然記念物として保護して、觀覽料を取つて一般に縱覽させて居る。

## 九、天狗の麥飯



善光寺名所圖會や信濃奇勝錄には、飯綱山に麥飯の樣な砂が出て、萬一の場合には食用になるので、「飯砂」とか「餓鬼の飯」とか名を附けて、山の名の飯綱も飯砂から訛つたと云ふ事が書いてある。

天狗の麥飯は一見黃褐色で、麥飯の樣で多少膠質で砂粒を混じて居るが、小諸の味噌塚にあるのは粘土や砂を混じて居るから、味噌の樣な感じがして枯葦等も混つて居る。

川村教授は之を培養して顯微鏡で檢査して、「種々の微生物や菌類やの混成で、特に圓形又は楕圓形の包膜性バクテリアが主成分で、其包膜中に鐵と硅酸とを含んで、鐵バクテリアに近い種類であり、多分岩石を溶して養分とするであらう」と唱へて居るが、外の學者の中には下等の藍藻類であると主張する人もある。

此天狗の麥飯は信州附近特有の珍しい植物で、現に小諸の外に淺間山・黑姬山・斑尾山・髻山・古海・古間・富士里等に產出するが、小諸の味噌塚が指定保護になつ

て居る。

## 一〇、戸隠升麻

明治十七年に矢田部博士が、戸隠で發見した日本特有の極めて珍しい植物で、其後久しく採集されず、自然其在所も知れずに居つたが、予は圖らずも大洞澤の栂帶中に盛んに繁茂せるを見出し、明治三十五年に畏くも時の　皇太子殿下が、長野師範に行啓を　幸に、學生田中・富岡の兩君に採集して貰ひ、台覽に供し奉り　殿下の御思召を奉じて、青山の東宮御所に献納の光榮を荷つた由緒があるので、爾來長野師範では此花を徽章に用ひたり、校旗に作つたりして居る。

戸隠山麓の森林中に雪解の　魁の花として、淡紫の六片の花を開く優美で上品の宿根草で、花瓣は却て小さく雄蕊も六個で、特に觸接によつて内側に倒れる感覺雄蕊



である。植物の感覺運動は比較的に珍らしいもので、戸隠升麻の様な目木科植物は此例として適當のものである。雌蕊は一個で、熟すれば白い果實を結んで、内に褐色の種子があり、之を蒔けば容易く發芽して成長する。

葉は掌狀で五裂し、薄くて裏面は白く、一葉柄が三つに岐れて、其先に一枚宛着いて居る。地下の莖や根は隨分太く確りして居るので、栽培は甚だ容易であるが、森林の下を好む陰性の草であるから、夏の強い日に當てれば、一日で弱つてしまう。

戸隠の外に、黒姫山や白馬岳や日光地方や越後の焼岳附近や、山形・秋田の兩縣にも發見されたが、日本の外には産せぬ世界的の珍らしい植物であるから、保護を指定されて居る。

## 一一、化粧柳

上高地高原の梓川沿岸に立てば、其枝振の如何にも圓滿に丸々として柔かく見え、柳の樣であるが幹は眞直に高く、皮は楝の樣に縱に裂けた植物を見るであらう。幼樹は白くて川原の砂の中に白い垣を作つて列んで居り、芽出しは紅くて非常に見事で、中井博士が之に化粧柳の名を與へた。老成すれば綠色の細い葉を川風に動かして、其枝に鶯が美しい聲を弄する樣は、何とも云へぬ自然界の美妙を感ぜしめる。

化粧柳は朝鮮の北部鴨綠江や圖們江邊から支那に及び、東はカムチャツカ・樺太等に分布して居り、西は蒙古からバイカル地方迄擴がつて居る東亞特有の植物で、北海道以南には產せぬものと思はれたが、先年北海道にある事が知れたのでさへ珍しい事と思つたのに、途中の連絡も無く、遠く離れた上高地高原に巍然たる森林をなして、三里內外の梓川沿岸に自生して居るのは、植物分布學上から見て、非常に面白い事實で、學術的に保護すべき大切な天然記念物である。

花は五月頃に雄花と雌花が別々の株に咲いて、雄蕊は垂れ下り、雌花には普通の柳の樣な蜜腺が無く、花柱と柱頭とが早く落ちるので、他の柳と區別される珍種である。果實が熟すれば、白い綿のある種子が風に散る樣子は柳に似て居つて、それが川原に落ちて白い若木となるのである。



## 一三、駒草

日本北アルプスの連山や八ヶ岳の山の背には、砂や小石の中に細く糸の樣に裂けた薄青い葉が根から四五枚出て、紅い馬の頭の樣な可愛らしい花の咲いた草がある。其花の形から駒草と云ふ名が附いて居り、御嶽では靈藥の原料として昔から珍重されて居たので、濫採の結果今では全く其影を見る事も出來ぬ。其主な成分は「デセントリン」である。

萼は二片で赤く、花瓣は紫がかつて四枚あるが、二枚は大きくて距と云ふ突起が

あり、花が開けば上の方へはね返る。外の二枚は小さくて内側にあつて其の頂點で合着して居る。此四枚其果實の熟する迄殘つて散らない。

雄蕊は六本で、三本宛二束になつて花瓣の中に包まれて居る、雌蕊は一本で柱頭が二つに裂けて、子房内には黑い種子が十四五粒もあつて、花が地に落ちてから發芽して、唯一枚の子葉が出るのみであるから、學者間に注目されて居る。

乾性植物の常として葉が細裂して蒸散の過度を防ぎ、又白い粉を全面に塗つて、過度の光線を避けるので、根を深く地中に入れて、能く夏日の乾燥にも堪へて、如何に強い日に當つても、其葉の萎れたのを見た事は無い。

之を栽培するには、深い植木鉢の底に炭の屑を入れ、其の上に砂を置いて駒草を栽る、特に上の方一寸位は粗い砂を載せ、水は出來るだけ少し宛與へるのが宜い。

可愛らしく美事なのと、藥になると云ふので、年々内所に駒草荒しが登るから、近年著しく減じて來たので、高山植物として保護する外に、適當の方法で栽培して其



繁殖を計る事が必要である。

## 一三、白馬連山の高山植物帶

白馬岳は日本北アルプスの北端の重鎮で、信濃・越中・越後の三國に跨り、巍然として雲に聳へて峰々が重なり合つて居るので、越中越後方面では蓮華山と云つて居る。

此連山が近年急に有名になつたのは、第一に大雪溪が二十町内外の溪谷を埋めて、夏でも尚寒氣のする程雄大で、如何にも高山氣分の味はれるに因るは云ふ迄も無く、氷河問題の材料も殘つて居る外に、其御花畑の廣い事と高山植物の種類に富んで居る事は、日本全國でも有數で、其盛夏の頃、一度に開く壯觀と氣品の高さとは、到底下界で見る事が出來ぬので、一たび足を此境に踏み入るれば、身は神仙に化したと思ふ程、精神的の得物がある仙境である。其頂上にも外の高山に見る樣な神樣や佛樣の

名を刻んだ石の建つて居らぬ事が、却て此山を神聖にもし、純眞にもするので、特に偃松帶も大きくて、雷鳥の繁殖地としても最も適して居ると見えて、登山者の多い割合に朝夕雷鳥にも御目にかかる事が度々ある樣な、各方面の特長がある。

北城村四ツ谷に着いて、夕日に輝いて居る白馬岳を仰げば、誰でも崇嚴の感に打たれぬものは無く、夜中の夢にも此神々しい山を見て、思はず心臟の鼓動を覺えるのである。

途中の森林帶を出ぬけて、大雪溪の下まで來て、突然眼の前に白雪の廣大な谷を見た時は、何となく恐ろしい樣な威壓される樣な氣分になる。此大雪溪の邊からは全部が所謂灌木帶や草本帶で、特に葱平邊になると實に千紫萬紅の美觀で、思はず山靈の技巧を賞めずには居られぬ。

山の背の斜面や砂原や岩角や斷崖や分水嶺や、其特有の事情に應じて、異つた植物が各好きな場所を占領して、笑を含んで人を迎へる如く、又雪溪の傍に來れば眞紅



な若芽や雪を貫いて出て居る蕾や、濕地を好む草や苔やが、所狹き迄に全盛を極めて居り、そこから流れ出る水邊には特にそれ相應の樣々の形や色をして居るのを見る事が出來る。

千早振る神の植ゑけん其儘を
御花畑にほふ八千草

白馬岳の御花畑の植物は「日本の高山植物の粹を集めたものである」と云ふ學者さへある位に豐富で、現在知られて居る種類が四百二十種以上あるから、此後の研究によつて尙其數を增す事であらう。其中でも雲間金鳳華・高嶺金鳳華・雲井旗竿・姫小米草・白馬千鳥・白馬薺等は特に珍しいもので、尙此外にも白馬冬葱とか白馬菅とか、白馬黃耆とか白馬赤花とか白馬風露とか、特に此白馬の名を冠つて居る所を見ても、他の山々に無いものの多い事がわかる。此外にも姫梅鉢草・高嶺苺・大栂櫻・奥山茅・嶺野刈安・矢筈唐飛廉・得撫草・南京小櫻・黑百合等の草々や、少し降つて戸隱

升麻・柴牡丹蔓等は學者仲間に非常の珍種として持て囃されて居る。

近年此御花畑を保護區域に指定されてから、特に其美觀が著しく目立つ樣になつたのは喜ばしい事である。

## 一四、上高地高原

上高地の秀麗は前から聞えて居つたが、近年新八景の選に入り、國立公園の候補に擧げられ、保護區域に指定されてから、一層遠近の注目を惹く樣になつた。

徳本峠の頂上から夕日に輝く穂高岳を仰いだ人は、「日本にもこんな偉い山がある か」との一聲を放つであらう。河童橋の袂で青い梓川を見ながら、川岸に圓滿な枝振の化粧柳を見、岳澤の殘雪を抱いた絶壁を見た人は、生涯此印象を忘れぬであらう。林間を縫つて明神池の幽邃なる水面に岩魚が泳いで居たり、四方の森の影を映した有



樣を見た人は、遠く神代に生れ變つた樣な淸々しい心持になるであらう。燒岳の剛健なる姿を望んだ人は一種の精神的教訓を得るであらう。田代池に泥炭地の成立を見たり、眞鴨が雛を伴つて泳ぐのを見たり、鶯と杜鵑と駒鳥と金襖子とを同時に聞いた人は、一種の樂園に在るの思に耽るであらう。

斯る景色を兼ね備へたる上に、學問上に貴重なる材料が非常に多いのであるから、色々の方面から見て上高地が憧がれの的となるのも當然の事であらう。

中井博士は上高地を賞めて、「四方の山々が崇高で、消殘つた雪が淸くて、學問上保存すべき特有植物が豐富で、分布上の研究に重要の材料を藏する處女林の存在は他に比類を見ることが出來ぬ」と唱へられ、小島烏水氏は「日本山谷の風光は日本アルプスに大成し、日本アルプスの風光は此上高地に縮寫されて居る」と迄激賞して居る。

此外に高山蝶の貴重なる種類が多く、岩魚の繁殖地として誂へ向で、小鳥の營巢及び棲息場として天惠を集めて居り、溫泉場もあり、火山もあり氷河研究の資料も澤山

で、テント生活の好適地であり、美術家や文士の嚢や詩稿を肥やすにもよい形勝地としては、恐らく是程の天地は容易に得難い事であらう。

斯る靈域は自然を破壞せざる程度に保存したいから、交通機關としての道路や車道やの設備とか、宿泊機關や通信機關やは、時世の要求に應じて相當に完成を望む次第であるが、其建物とか其他の設備にしても、深い注意を以て計畫完成する事が大切である。

## 一五、地獄谷の噴霧孔

下高井郡平穩村夜間瀨川の支流横湯川に「地獄谷」がある。磧の中から多量の水を含んだ水蒸汽を、三四十尺の高さに噴出する壯觀と、轟々たる音響が谷に響いて、中々に物凄い。



噴汽孔の周圍は小紋岩で、孔の口には砂や霰石が沈澱して、所謂「釜」が出來て、其口の小さい時程、噴出の勢が強く、特に朝夕は噴出の量が多い。其水蒸汽の中には炭酸ガスと硫化水素を含んで居る。

學術上の資料たる點から見ても、名勝を保存する點から見ても、現狀の儘に保存するが宜い。

## 一六、白骨及湯俣の噴湯丘

白骨溫泉は乘鞍岳の山麓で、南安曇郡安曇村の梓川の支流・湯川を遡つて、湯澤の左岸の小階段地に在つて、弱い酸性で、其浴槽には炭酸石灰が沈澱して諸病に効がある。

此附近は大体此炭酸石灰の沈澱で蔽はれて灰白色に見える。白骨の名は之から來

たものであらう。少し降つて湯川に移る所に石灰石の「トンネル」があつて、俗に「スイドホシ」と云ふて、鐘乳石が乳の様に垂れ下つたり、霰狀の方解石が柘榴の實の様に固まつて居り、其附近の鬼ケ城には噴湯丘が釜狀をなして草叢の中に殘つて居る。

又大町驛から高瀬川を遡ること九里、湯俣・水俣の出合に出ると、湯俣に沿へる約四町内外の谷には、釜狀の噴湯丘があつて、薄赤い美事な小高い「釜」から湯を噴き出して居るもあり、河床から湧き出すのもある。湯泉は無色で弱い酸性で、其釜は炭酸石灰の沈澱から成つて居るが、滿俺を含んで居るので「ホンノリ」と薄赤くて中々美事である。此附近や釜の中に霰狀の方解石があつて、俗には「霰石」と云ふて居る。

此白骨も湯俣も、元熱湯中に炭酸石灰が溶けて噴き出して來て、溫度の冷却と壓力の減少と炭酸ガスの蒸發との爲に、石灰が沈澱したもので、地中の深い割目の中で鑛脈の生ずる有様が、眼の前に見られるのは、非常に珍らしい上に、一ケ所に是れ程多數が集まつて居る例は、格別珍らしくて、世界中でも隨分少ないさうであるから保護



を要するので、妄に破壞してはならぬ。

## 一七、中房溫泉

松本市から信濃鐵道に乘換へて、有明驛に下車すれば、眼の前に黑い富士形の山がある。是は有明山で一に信濃富士とも云ふて　後鳥羽天皇の御製にもある程、古くから有名である。

片しきの衣手寒くしぐれつつ
有明山にかかる白雲

自動車で一里餘り、田舍道を進めば、途中に天蠶を飼つて居る櫓林があつて、有明溫泉や有明神社を過ぎて、三里餘りで中房溫泉に着く、途中の洞穴や樹の根には光蘚が鮮かな綠色の光を放つて居る。

中房溫泉は、アルカリ硫黄泉で、カリを含んで居るので滑らかで垢が落ち易い。出口が十數ケ所あつて、噴汽孔もあり、蒸風呂もあり、浴槽もあり、「プール」もあり、林間學校もある。溫泉からは硅華が盛んに沈澱して色々の狀態をして居るのが、學問上から非常に面白い。特に膠狀の硅酸や乾酪狀や毛皮狀や藻狀の硅華を沈澱したり、此硅華と下等植物との共生の現象などは、學者仲間に珍重されるので、保存の價値がある。

此外に高山蝶の珍種雲間褄黄蝶や、暖地性植物の水杉やが産する事は、玆に附加へて置く價値があると思ふ。

## 一八、寢覺の床

中央線上松驛から南へ十二丁、寢覺の里に臨川寺と云ふ古寺がある。其庭から見下



ろすと寢覺の床の奇勝が見え、木曾川に臨んだ辨天島と、對岸の所謂「浦島の釜岩」や「硯岩」の白いのが針葉樹の林を背景とし、青い水の流れに映つて居るのが目につく。

此邊は一帶に花崗岩で、狹い所は僅に二十四尺で、岩壁の高さは三十尺もあつて、其峽谷を木曾川が貫いて居る。此奇景は岩石の割れ目の出來工合と、木曾川の水蝕作用との共に働いた爲に出來たもので、釜岩や硯岩は大きな石が水流中の平らな岩の上にあつて、流されもせず長い年月の間ゴロゴロして居つた爲に、自然に掘つた凹みである。學者は之を甌穴と云ふて居る。

甌穴は左程珍らしいものとは云へぬが、是れ程大きな是れ程深い完全のものは中々珍らしい上に、昔から名勝地として有名で、汽車も此邊は特に徐行して居る程であるが、せめて三四分でも停車して、旅行する人々に賞觀の時間を與へたら、一層面白い事と思ふ。

## 一九、天然記念物

天然に現存するもので特に珍らしく、日本特有であるとか、信濃特有であるとか、又他府縣にあるにしても極めて稀で、學問上大切なものとか、風景の上から是非無ければならぬもので、其數が少ない爲に、間も無く絶滅する恐れのあるものや、年々其數が減つて行く傾のあるものや、發電事業とか鑛山とか、道路とか汽車や電車とかの爲に、あたら大切なかけ換の無い寶庫を破壞する恐れがある場合には、之を天然記念物として保存し、妄に手をつけぬ樣に大切にせねばならぬ。

長野縣は大縣で、其面積が廣い上に、日本アルプスの樣な大山脈が南北に貫通して居り、火山脈が其間を走り、信濃川・木曾川・天龍川・富士川等の大河の源泉をなして居り、溫泉の湧出も中々多く、自然保存すべき此天然記念物も多い事は云ふまでも



無い。

上述の動物や植物や鑛物や名勝等は、其意味から大切にすべきもので、其現存の場所を地圖の上で一目に見られる樣にして置くのは便利の事と思ふ。

其地方地方の人々は、其所有の光榮の爲にも、又は其鄕土の責任としても、注意して保存する樣にしたい事は申す迄も無く、今迄に未だ知れて居らぬ事柄でも、氣がつき次第其道の人に知らせて、此大切な國寶を失つたり、破壞したりして、悔を他日に殘さぬ樣にしたいと切に望む次第である。

## 指定天然紀念物分布圖

# 後編

## 二〇、山鼬

山鼬は全体が鼬に似て小さく、夏は頭や背中の全部から尾にかけて栗色で、胸や腹や指先や爪は白く、尾の先には黒い長い毛の總がある。冬になると尾先と眼とが黒くて、全体は眞白になり、鼻先は小豆色である。眞白な体に眞黒な目で、擧動が敏捷であるから、如何にも愛くるしい。胴の長さが十七仙米から十八仙米、尾の長さが八・九仙米である。

高山の岩の間や木の根に住んで、秋になると落葉の下を潜ることが上手で、中々容易に捕へられぬ。冬になれば村落に近い溝の中迄下つて來る。物に驚けばキチキチと鼬の様に鳴く。

果實や小さな動物を好んで、大食の方である。一つの巣の中に雉の卵を引いて來て、五十個も貯へて居た例もあれば、兎を殺して貯へた例もあるのは驚くべき事である。

鼠や兎を捕るので農家や山林には有益であるは勿論、毛皮は黑い目玉を入れて、婦人用の襟卷や裝飾用に供し、贅澤の人は外套に作るので高價であるから、絶滅の恐れがある。今の内から捕穫を禁止して保護すべきである。土地によつて「オコジョ」と云つたり、「オンコロ」とも云ふて居る。

## 二、日本犬

洋犬が入つてから、雜交の結果、純粹の日本犬が殆ど居らなくなつて、僅に山間の獵師が飼つて居るだけとなつた。

日本犬は其性質が勇敢で機敏であるから、野獸や鳥類やの狩獵用として適當で、此



點では普通の洋犬の比では無い。其の純系を保存することは、動物學上、犬の系統を知る上にも、家畜として人類の友として居たから、人種の移動上の參考にもなり、狩獵用としても固有の特長を存することが必要である。

本縣では南佐久郡川上村は千曲川の源泉地で、獵師も多く、現に日本犬が飼はれて居るので、雜交を防ぐにも比較的に便利が多いから、此地方を日本犬保存區域に指定することは急務である。

### 附、豺

昔話によく出る狼は、日本には全く産せず、普通は豺を狼と云ふて居る。

今日では本縣内には全く見られなくなつた樣であるが、若し現に居ることが確かであるとすれば、是非保存したいものである。

南佐久の内山村で、十一歳の龜松が狼を鎌で殺して父を助け、幕府に召出されて褒美に預つた話は割合に近い事で、「孝勇龜松之碑」は三島侍講の撰文で、現に荒船山麓の逢月に殘つて居る。

又上水内郡日里村で、十七歳の少女大日方ひのが、草刈をして飛びつかれた狼を退治した話があり、其牙と松代藩から賞められた表彰狀が現存して居る。

戸隱地方でも、松本近在にも、諏訪の山裏にも、上伊那地方にも、明治に入つてからも、時々豺が出た例が、老人の實驗談に殘つて居り、馬棄場に豺が出た例や、「豺落し」を作つて之を捕つた事實を見た人さへある。

確實に豺の居る事を知つて居る人があつて、之を保存することが出來れば、學術上の金鵄勳章である。

## 三、高山蝶



信州は山の國で、大日本帝國の屋根であるとも云はれ、本州の脊梁であるとも云はれて居る。三千米以上の高山十七座、二千五百米以上の高山六十餘座を有する、日本アルプス連峰の大部分は信州に屬して居るので、高山植物帶の天然記念物として保護される事は、前に述べた通りであるが、高山性の昆虫、特に最も人の目につき易い高山蝶の種類も亦多く、學者や採集者の是等の蝶を目當てに來る人も少なくないから、今の中に保護の方針を定める事が大切である。

### □雲間褄黃蝶

白蝶の樣で小さく、翅を開いた大きさが四十五粍内外で、雄は翅の表面の外の半分は柿色であるから、立派で直ぐ目につく。後翅の裏面には綠と黑の雲紋が網の樣になつて、表面からも幾分透かして見える。雌は柿色がなく、前翅が白い外は雄と變りが無い。

高山蝶の中でも、最も珍らしく最も可愛らしく、其姿が如何にも山靈の權化である と云ひたい程、優美で可憐である。

槍ケ岳や鮎留や中房溫泉邊から、大河原や甲州白峯の麓等に居り、又富山縣の棒小屋附近にも居るが、他の產地は未だ見當らぬ。

## □深山白蝶

普通の線黑白蝶よりは少し大さく、翅の脈は皆黑くて、後翅の裏面の基部に丸い黃斑がある。

上高地高原や諏訪側の八ケ岳中腹や、南佐久の川上の高原には中々多くて、其飛び方も遲いから、容易く手で捕へる事も出來るが、他の地方には無い奇品である。

## □山紋黃蝶



紋黃蝶によく似て居るが、前翅の外緣が眞黑で、黃色の斑が無い事や、後翅の中室に柑色の點の無い事や、少し小形で高山性である事等で區別される。

久しく淺間山特產で內外人に知られて居たが、四阿山や日本北アルプスから立山迄發見されて居る。

## □小緋緘蝶

緋緘蝶は朴の害虫で、朴の生ずる地方には何處にも產するが、此蝶は蕁麻の害虫で、高山性で形が遙かに小さく、翅の裏が大層黑味勝ちであるので區別が出來る。

初夏から初秋迄發生して、日本アルプスでは、到る處の山頂に居り、往々谷を下つて平地まで來る事もある。飛び方が非常に早いので採集し難い蝶で。此類の他の蝶の樣に蝶の儘で冬眠する習性は面白い。

□高嶺日影

翅が黄色味のある灰色で、前翅にも後翅にも二三の眼紋がある。裏面は暗色の細かい綾の様な紋があつて、多少波形に屈曲して居る。

八千尺以上の偃松帶で、小石の磊砢して居る所に棲んで、擧動は緩慢で、一寸見ると蛾の様に遲く、羽を疊んで地上に横になる癖がある。

信州以外では極めて稀であるが、淺間山・八ヶ岳から北の方の山岳に多く、遠く白馬岳や藥師岳にも及んで居る。

□雲間紅日影

翅は黑味勝の褐色で、天鵞絨の様な光澤がある。前翅にも後翅にも外緣に近く柿色の帶があつて、各室に黑い眼紋がある。裏面は淡い褐色で、柿色の帶の內側に眞白の



アルプス型の山がある。近い種類の紅日影蝶と高山の御花畑に飛んで居るが、少し熟練した人は其飛ぶ樣子を見ただけで、容易く區別する事が出來る。

□高嶺黃斑挿

花挿の一種で、暗黑色の地に橙色の斑紋が散在して居る。七月中旬に出る珍種で、日本では上高地高原と島々谷邊の特產と見られて居る。

□概論

是等の蝶類は、高山性のものか多く、其分布區域も狹い上に、其數も極めて少ないものがあり、蕃殖力も自然制限されて、特に近年は漸次減少の傾があり、學術的に貴重の種類で、中には世界的の珍種もあり、一度絕滅の悲運に遇へば、二度と生れ出る見込が無いから、保護の計畫を立てる事は、今日の急務であると思ふ。

## 二三、螢

螢が初夏の夜を飾る昆虫で、兒童の注意を惹くは勿論、大人すらも其美觀に促されて、螢見の列車さへ出るは云ふ迄も無い事である。

本縣内に普通に居る螢は、源氏螢と平家螢との二種であるが、古來の名所としては諏訪郡から上伊那郡に亘る天龍川沿岸や、小縣郡から埴科郡に接して居る岩鼻や、下高井郡中野附近等は其主なるものであらう。

天龍川の沿岸は川岸村から伊那富村・朝日村に亘る約一里半の區域が最も保護に適して、現に小學校教員や青年會員等が協力して、其保護を說きもし、實行もしつゝある。他の地方でも此例に倣つて保護する事を望む次第である。

特に螢の保護は、其昆虫の食物たる河貝子や「モノアラガヒ」や宮入貝の蕃殖を妨げるので、間接には人体寄生虫の中間宿主を少なくする事になるから、所謂一擧兩得と



云ふべきであらう。

本縣の山地には、此二種の螢の外に「伊吹螢」と稱する種類も存在するから、此方も其習性や食物やを調べて、若し必要な事が分れば、同時に保護したいものである。

## 二四、社叢

諏訪郡中洲村諏訪上社社叢は落葉樹の自然林であり、上伊那郡小野村、東筑摩郡筑摩地村矢彦小野神社社叢は、共に自然林に近い針葉・濶葉兩方の混交林で、此地方の古代の林相を知るべき貴重なる遺物であるから、學術的に保護する必要もあり、又風致とか水源涵養の上から見ても、下草たる植物の成育上から見ても、保存すべき價値がある。

上社社叢には現に八十餘程の植物があり、又矢彦小野神社社叢には百五十餘種があ

つて、其附近の地に比較すれば、著しく其種類が多いのである。

## 二五、植物遺存帶

白馬岳や槍ケ岳高山植物帶の保護を要する事は、前に述べた通りであるが、此外に八ケ岳や、中央アルプス（駒ケ岳連峰）や、南アルプス連峰中の東岳・荒川岳の御花畑や、仙丈岳や白峰連峰の御花畑等は、十分保護の價値がある。今茲には煩を避けて此事を言明するだけに止めて置く。

南アルプスの中腹の岩壁や岩野や砂礫地や荒地に、高山植物の群落が殘つて居るものは、一應之を保存して置いて、深く研究する必要がある。併し是等の植物分布は唯溫度との關係許りではなく、土壤の性質や雨雪の分量やの影響をも受けるのであるから、是も考へて見ねばならぬし、又其岩壁が氷期時代から今迄、同一の場所に現存して居た證據が無くては、之を直ぐに氷期時代からの遺存植物帶と云ふ事は出來ぬ。



筑摩山脈に孤立して高山植物があり、特に偃松の殘つて居ることは面白い事實であり、又西筑摩郡の木祖村と奈川村との間の境峠に混交遺存帶あり、鼠宿や半過の岩鼻に珍らしい植物區系を見、木曾地方に石南花類の變種が澤山あり、上伊那の駒岳山麓に紅葉の變種が多いのは、孰れも學術的に大切の資料であるから、現在の狀態に保存したいものである。

## 二六、二度栗

枝垂栗の事は曩に述べたが、栗の變種で一年に二回花を開き實を結ぶものがある。俗に二度栗とか、三度栗とか云ふて居る。花は普通の栗より後れて、第一回が七月中旬で、第二回目は九月上旬から中旬で、二回共に實を結ぶのである。

下伊那郡大鹿村大河原松岡氏庭内、同郡上飯田町蜂谷氏宅地、上伊那郡富縣村櫻井鹿野氏宅地、同郡朝日村平出中村氏宅地、埴科郡松代町田中氏宅地、下高井郡市川村平林岸氏墓地等に栽ゑられてある。

昔から親鸞上人の植ゑたものとか、弘法栗とか、梶原栗とか、山栗とか、柴栗とか矢筈栗とか稱へられしものにて、上野・下野・因幡・紀伊・石見・土佐・筑前・越後等にも産するさうである。

之に近い栗の一種、「八房栗」が小縣郡和田村觀音澤の路傍にあつて、栗毬が重なり合つて成長して居るもので、果實は十分成熟せずに終るから、繁殖は唯接木の外は無いので、特に保存の必要がある。

古い書物には越後の八房栗の事も書いてあるが、本縣内の例は外に餘り聞いた事も無い珍種である。



## 二七、松と杉

松の名木としては、下高井郡延徳村字三ッ輪の老松「飯森の松」、北佐久郡岩村田町の「相生の松」、松代町の田中氏邸内の枝垂松、上伊那郡南箕輪村字南殿の「靈松」、同郡美和村の圓座松及び美松等が調査されて居り、それ相應の傳説もある。尙此外にも各地方には相應の歴史や由緒ありながら、未だ廣く世に紹介されない名木が多からうと思ふ。好事家の注意と保護とを望むものである。

杉の大木で有名なものは、下伊那郡三穗村字立石の二本杉、同郡根羽村字月瀨の大杉、北安曇郡神城村及び社村の神明宮の大杉、諏訪郡中洲村字神宮寺神苑の五本杉等である。

## 二八、姫刺樅

世界各地には日本特有樹木として、もてはやされて居るのに、日本では其原産地さへ知られぬ植物の一種に姫刺樅がある。

此の植物は八ヶ岳西岳の御料林中に、薙澤と柳窪の間と、牛首とに十數本自生して居り、山麓の氏神の森や寺の境内には各地に散在して居り、北佐久郡川上村にも社地に數本あることが知れた。

幹は眞直で枝は少し斜めに上つて居るので壯大に見え、皮は灰色で滑かであるが、老樹では厚い鱗片となつて剝げる。

葉は短かくて剛直、其先端は人を刺す程鋭いので其名が附いて居る。

鱗果は殆ど柄が無く、長い卵狀の紡錘形で、初めは綠だが後には黃綠色となり、長さ一寸五分から二寸三分に達する。

材は年環が正しいから建築用にもなり、枝は根元から四方に密生して、其葉の綠は特に濃いから庭樹としては中々貴重される。



## 二九、公孫樹

下高井郡瑞穗村神戸の大公孫樹は俗に乳垂銀杏と呼ばれ、上水内郡長沼村西嚴寺境内の大公孫樹は「袈裟掛の大公孫樹」で響いて居り、埴科郡松代町小野氏邸内、上水内郡神鄕村須田氏邸内、及び上高井郡綿内村善法寺境内の公孫樹は、共に枝垂公孫樹で知られて居る。

公孫樹は東洋固有の植物で、日本から朝鮮・支那に殘れる前世界に繁榮した遺物である。特に其精蟲が平瀨氏に發見されてから、分類學上の位置が變つた程、學問上からは重要の植物であるから、東洋で之を保存せなくてはならぬ。其枝垂のものは身延山の御葉附公孫樹と共に變態上の好例となるので、一層保護の急を認めるのである。

## 三〇、櫻

我が大日本帝國は外人の仰いで「櫻の國」と稱する地であるから、春の花の時期には目の醒める程美しい。隨つて其品種や名木の多い事も固より當然である。

上水内郡芋井村字泉平の「神代櫻」は彼岸櫻の一種東彼岸で、俗には素盞嗚尊の手植と云はれて居る。近年では樹幹に腐朽した空洞さへ出來て、樹勢頗る衰へて來た。同郡小田切村塩生の巡禮櫻、下高井郡夜間瀬の千歳櫻も矢張同種で、上者と姉妹樹たる價値がある。

北安曇郡美麻村字大塩の「靜の櫻」は義經の妾靜が杖を挿したものとの傳說で興味があり、高遠公園の小彼岸は、舊兜ケ城趾にあつて、仁科信盛の忠勇を偲ばしめると共に、花時の白雲が三峰川と藤澤川に臨んで居る壯觀は實に見事である。

下伊那郡三穗村立石の枝垂櫻と云ひ、東筑摩郡里山邊村の白枝垂彼岸と云ひ、上伊那郡小野公園の枝垂山櫻と云ひ、各地に散在せる枝垂の變種は一々枚擧に遑が無い。近時では到る處に染井吉野を植ゑるから、櫻の名所が變つて來るであらう。



武石峠の頂上附近にある「武石櫻」は一見頗る珍しい種類であるから、特に保存の方法を講ずるが宜い。

## 三一、梨

下高井郡往郷村馬曲の山梨は、徑四尺餘の大木で、樹幹は半ば朽ちて居る。里人は源義仲の越後口へ出る時に休憩した樹であると唱へて居る。夜間瀬村熊野宮にも亦老梨がある。

南佐久郡川上村野邊山原の路傍にも之と相伯仲する山梨があつて、蔚然として枝を張つて、枝先は少し枝垂れる樣になつて、遠く之を望んでも壯大に見える。

## 三二、槲

南佐久郡南牧村平澤山に槲の一變種枝垂槲があつて、傾斜地に這ふ樣に地上又は地中を蛇行し、長い木は三十餘尺にも達して居るのは奇異の感じがする。

上田市常入川上氏の庭内に羽衣槲がある。葉が深く羽狀に裂けて、羽衣の樣に見えるから附けた名である。佛人フランシエ氏は之を槲の一種としたが、實は槲の畸形か變種と見るべきであらう。園藝品としては往々栽培されて居るが、其葉の面白いのと學術上興味あるものであるから、枯死せぬ樣に大切にして貰ひたい。

## 三三、其他の植物

橡の大木では、上伊那郡美和村字非持の諏訪神社社木で、三峰川の右岸段丘狀にあつて、目通り太さ四十四尺・高さ九十五尺、樹下の面積三百四十二坪と云はれ、鬱然として頗る壯觀である。又上水内郡七二會村字赤岩の橡の木も、目通り四十五尺・高



さ百三十尺、開張東西三十間・南北四十五間あつて、傳說や迷信があつて保存されて居る。

下伊那郡泰阜村篠田氏宅地内に老桑樹があつて、目通り太さ十一尺・高さ四十尺、枝を張る事東西九間・南北十間半、樹下の面積九十四坪を有して、桑としては珍らしい大木で保存されて居る。

上水内郡戸隱村の通稱「上野の桂」も、目通り三十五尺・高さ九十三尺、枝の開張東西八十七尺・南北七十八尺あつて、遠近の信者は親鸞上人の舊跡として參拜するし、清水氏の祖先と深い關係や歷史があるさうである。

南安曇郡明盛村三柱神社境内の刺楸は、方言「エンダラ」と云ふて、目通り太さ二十四尺、高さ百尺以上ある。

更級郡稻荷山町金毘羅山一帶の地は、柿の原種たる山柿の集團があるので、此柿の原種を保存する事は學術上大切である。此外冠着山の西北八幡村に亘つて散在して

居り、上田市附近の山中にも、下伊那の各地にも散生して居る樣である。

上水内郡神鄕村字豊野の蹴躅山、西筑摩郡開田村西野附近、南安曇郡烏川村須砂渡及び筑摩山脈、立科山麓等は蹴躅が蕃殖して居つて、其種類も亦少なくないから、賞觀の上からも、學術研究の上からも、妄に之を荒さぬ樣に保護したいものである。

石南花の種類に富める事も亦本縣の一大特長で、賞觀、學術兩方面から保存するの急務である事を感ずる。

中房溫泉の水杉や、西筑摩郡大桑村越百御料林内の「ミヤマツチトリモチ」も、植物分布上より見て貴重な材料であり、西筑摩・下伊那・南佐久等には、往々南方よりの暖地性の種類が入り込んで居るので、將來學術上の保護區域とすべきものと思ふから、其地方の人々も十分に注意して、珍種と認めたら斯道の人に早速報告して、調査を乞ふ樣にしたいと思ふ。

米子や傍陽や守屋山や協和牧場やに分布して居る「ツキヌキサウ」も、日本にあるか



無いかと云ふ樣な學者間の疑問を解決して居り、湖沼・溪流・濕原等の研究も、學問上にも、産業上にも新しい材料を供給すると思ふ。地方の學術的研究は此意味に於ても大切の事である。

## 三四、蛇石

上伊那郡川島村字川上入に、里俗「蛇石」と稱する梯狀脈がある、天龍川の支流横河川を遡れば、秩父系に屬する黑色粘板岩の中へ、殆ど同じ厚さの白い石英脈が、殆ど等距離に百數十條貫入したもので、其或は高く或は低く河中に隱見する有樣は、如何にも蛇腹の觀を與へて居る。斯る現象は、地質學上興味の多い例で、岩石學や礦床學の上からも、研究すべき事柄が少なく無い材料である。

蛇石の外に同川の伊良澤との合流點に、俗稱「蛇石の尾」と稱するものがあるが、是

は單に岩脈で現出の狀態等も、蛇石と等しい梯狀脈では無いのである。

## 三五、武石と綠簾石

小縣郡武石村字下武石の富澤山の御坂層凝灰岩中に、散在して「武石」が出る。俗に此丘陵を「ブセキ山」と呼んで居る。

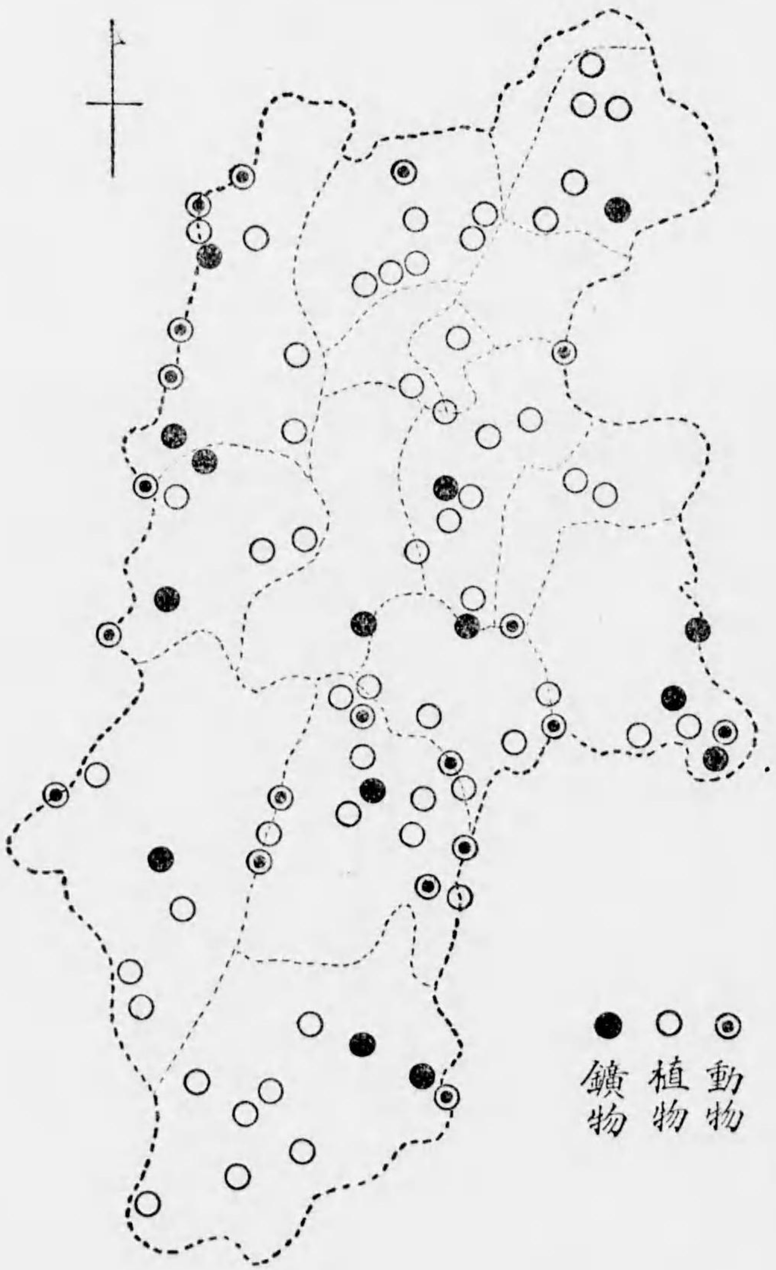
武石は云ふ迄も無く、黃鐵鑛後の褐鐵鑛で、多くは六面体と五角十二面体との集形であるが、五角十二面だけのものも、稀には五角十二面体と八面体との集形もある。

同村字下本入小山澤に俗稱「燒餅石」がある。御坂凝灰岩中に第二次鑛物として、綠色の綠簾石の所狀結晶の晶簇を有するものである。大きなものは徑十五仙米の塊で、之を割ると綠簾石の美しい晶簇が出る。

此二種は本縣鑛物採集の先覺者であつた故保科氏が、學界に紹介したものである。



天然紀念物分布圖



## 三六、鐃鈸石

諏訪・東筑摩兩郡の境界で、鉢伏山の西南に「タカボッチ」と云ふ小山がある。是から鹽尻方面に向つて流れる小流を四澤と云ふて居る。此附近の凝灰岩質頁岩の中に丸く薄い「レンズ」形の石が出る。其形が鐃鈸に似て居るので、俗に「ミョウハチイシ」と云ふて居る。割つて見れば中には黑い植物の化石が見える。此の樣な團球は縣下に稀であつて、其化石も學問上價値のある材料であるから、保存の必要がある。

## 三七、餘論

南佐久郡川上村や、北安曇郡爺ヶ岳の水晶の珍らしい結晶だの、川上村の電氣石の平たい結晶だの、下伊那郡大鹿村の霰石だの、和田峠の柘榴石だの、南佐久大日向や



上伊那郡美和村戸臺の三角貝だの、下伊那郡喬木村毛無山や、大鹿村の球狀花崗岩などは、學術上貴重の材料で、縣下の他の地方にも、埋もれたる寶が少なくないことと思ふ。

有爲の人々は此未開の天地を拓いて、一面には學問の發達に役立つ樣にし、一面には產業上の資料に供して、有益の寶を利用することは、獨り自身立身の爲めのみでなく、大きく考へれば帝國の爲になる事と思ふから、一肌ぬいで其腕を揮つて戴きたいと熱望する次第である。

# 信濃郷土叢書（全十二卷內容）

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 第一編 | 諏訪明神 | 山田肇著 | 第七編 | 俳人一茶 | 高津才次郎著 |
| 第二編 | 善光寺物語 | 秋野太郎著 | 第八編 | 佐久間象山 | 佐藤長洲著 |
| 第三編 | 高遠城 | 唐澤貞治郎著 | 第九編 | 信濃天然記念物 | 矢澤米三郎著 |
| 第四編 | 木曾義仲 | 春日賢一著 | 第十編 | 日本アルプス | 河野齡藏著 |
| 第五編 | 眞田幸村 | 藤澤直枝著 | 第十一編 | 淺間山 | 八木貞助著 |
| 第六編 | 太宰春臺 | 前澤政雄著 | 第十二編 | 信濃の氣象 | 梶間百樹著 |


昭和四年六月十五日印刷
昭和四年六月二十日發行
昭和四年六月廿五日再版發行
昭和四年六月三十日三版發行
昭和四年七月四日四版發行

（非賣品）

著者　矢澤米三郎
長野市旭町乙一

發行者　信濃郷土文化普及會
代表者　所長吉
長野市妻科四〇八ノ一

印刷者　長澤政美
長野市旭町乙一番地

印刷所　長野新聞株式會社

發行所　信濃郷土文化普及會
長野市旭町乙一
電話五二五番
振替長野六〇五六番



不許複製

終

信濃鄉土文化普及會